

「感謝の教育」の推進

松浦明博

1 「感謝すること」および、「感謝を教えること」の目的

私達は人との関わり合いの中で生きていく(「間柄的存在」「社会的動物」等)。感謝は、言葉や態度に表さなくとも心の中に持っていれば、それで良い、と考える人もいる。しかし、人間関係や社会生活の中では、「ありがとうございます」「助かりました」という感謝の思いを言葉や態度で表すことが求められる。

「ありがとう」は、社会生活を営むうえでのマナーや礼儀でもある。また、人は、自分が何かをしてあげれば、相手から人から感謝され、人に何かをしてもらえば、相手の人に感謝すべきだと思っっている。

しかし、感謝には、二通りある。それは、「していただく感謝」と「させていただく感謝」である。一般に、お世話になったり貰い物などお蔭をいただく場合の「していただく」ことへの感謝が説かれている。しかし、「させていただく感謝」こそ忘れてはならない。それは、福沢諭吉の母お順の逸話に見ること

が出来る。

諭吉の幼少期、近所に貧しい女性がいた。母お順は、ボロボロの着物、ぼうぼうの髪をしたその女性を自宅の庭先に招き入れて、頭の虱を取り、諭吉に命じて、虱を五十四、百匹と石の上でつぶさせた。母は虱を取らせてもらったお礼に、女性に握り飯を作って食べさせたという。隣で施しを与えてあげたのではなく、親子で布施をさせていただいたことへの感謝を実践したのである。「情けは人の為ならず」、人に情けをかけて、相手に感謝されてもされなくても、巡り巡って福沢家に返ってくることをお順は知っていたのである。それゆえ「させていただけたことに感謝」できたのである。このような母であればこそ、諭吉のような開化期の偉人・教育者を生み出したのであろう。「虱取りの石」は、今も福沢諭吉の旧居(中津)の庭に残っている。

さて、感謝の反対は何か。それは不平不満や一方的な批判、怒りである。自分の思うように行かない、意思に反することをされる(癡)の煩惱を発生させ、「苦しみ」の原因をつくることになる。批判精神は必要だという人もいる。健全な批判精神は、社会科の教

科指導で養成するものだが、それは、一方的な批判ではなく、話し合いや客観的な資料・データ等に基づき冷静に比較検討されるもので、課題発見や問題解決に導くものである。

一方的な批判や怒りは、対立、さらには闘争を惹起させる。我々が目指す社会は、恒久平和の社会であり、そのためには、人と人、人と社会、人と自然との調和のとれた関係が大切である。

人は、自分はこれだけしている、あれだけしてやった、それなのに一体なんだ、と腹を立てる。しかし「させていただく」という謙虚な思いがあれば、見返りを求めることもなく、不満や怒りも生じにくい。

いずれにせよ、感謝は大事だが、お仕着せの感謝は良くないし、感謝を強制すべきではない。

教育とは、「知識を教える」とことと認識している人が多いが、「価値を教える」、あるいは「価値を伝える」ことも教育の役割であり、道徳教育はその最たるものである。感謝は、形に表すべきであり、表してこそ(社会生活における)感謝と言える。しかし一方で、感謝の気持ちに形に表すことができない、あるいは上手くない児童生徒がいることは確かである。その生徒の心情を配慮して丁寧で分かりやすく導く必要がある。感謝の表し方を教えることもまた、「感謝の教育」であり、それによって、より良い人間関係を築き、より

良い家族関係や学校、社会の礎を築いていくことが、「感謝の教育」の目的である。

「感謝とは感謝の想いを形にぞ現してこそ真事なりけれ」

2 指導事例

「感謝の教育」の指導事例というと、想起されるのが、いわゆる「二分の一人式」等の感謝の手紙である。これについては否定的な見解もあるが、これらの分析を行い、さらに実話（勧められて書いた「感謝の手紙」によって長年にわたり不和だった親子関係が修復され、さらには家族が復活した）等を例に反論を行った。

これまでの教育現場での「感謝の教育」に関する主な指導実践事例を掲げる。

- ① 三学年の総括としての講話
- ② 卒業式の答辞の指導
- ③ 東北大震災（3・11）の翌四月の始業式・着任式での挨拶
- ④ 教科「奉仕」の指導事例…地域の関心と感謝、および生徒の変容

（帝京科学大学特命教授 会員）

明治百年と日本教師会

—「日本の教育」百二十一号より—

すでに各方面で話題の中心となつてゐるが、今年には明治維新から百五十年目の記念すべき年である。しかしながら、特に教育の面においては、今年度の研究大会主題設定の趣

旨にもあるやうに、今後克服すべき課題が山積してゐる。教育関係者のみならず、国民一般の一層の自覚が俟たれる。

ところで、今から五十年前、即ち明治百年の記念年ほどのやうな状況であつたのか。また、日本教師会ほどのやうに対応したのか、当時の「日本の教育」の論説を再掲し、今日を考へるよすがとしたい。なほ、当時の首相は佐藤栄作である。（編集部）

《再録》

論説「明治百年を迎えて」

昭和四十三年の新春を迎えた。本年は、明治から数えて満百年目にあたる。まことに記念すべき年である。この明治百年を迎えて、その記念の意義を明確にする必要がある。

「明治百年」にとりくめ

およそ国家における歴史生命は、国家創業の精神を常に有していることによつて連綿と続き、発展するものである。明治維新において、国家創業の精神・志に思いをいたしたことに、そこに歴史が一環した流れを保ち、さん然たる光を放つたと同様に、明治維新の精神を明確にして、それを自覚したときに、はじめて明治百年の流れが現在に直接結びつくのである。明治百年を明治百年たらしめるためには、その維新の精神を知らなければならぬ。それなくしては、百年の歩みを理解することはできないであろうし、記念する意義も失われ、さらには、明治百年もないとい

うことができる。われわれは、明治百年の出発点である明治維新を想起し、そこから発しなければならぬ。

しかしながら、ともすれば維新の本質が見失われている傾向にあるのが現状である。その本質を忘れて近代化の面のみを強調したり、はなはだしくは、これをゆがめて、ブルジョワ革命とみなすものもある。

また維新を正しく評価し、国民的自覚を喚起しようとする国家的な明治百年記念行事に対して、建国記念の日の問題と同じように「現代の歴史学の成果を破壊し、反科学的な歴史観を国民に浸透させようとするものであり、また日本国憲法の民主主義と平和主義の理念を否定し、帝国主義と軍国主義の思想、感情を育てようとするものだ」などと反対する動きもある。これはいうまでもなく、「首相の台湾、ベトナム訪問やワシントンもうでに反対」したことと相応する一連の共産革命への有利な条件をつくり出そうとしているものにはかならない。

かかる動きに対しても、また戦後ようやく国民的自覚への足取りをとりもどしはじめたかに見える現状に対しても、今年には明治百年の問題に取り組むことに力を注がねばならないと思う。

維新の精神を立脚点に

維新の根本は、国家の本質を考え、それをもとに力強い前進をはじめたことである。外国に例のないほどの輝かしい改革を国史の上

にみせ、伝統を尊重し、歴史を進展せしめた。わが国はこれを機に飛躍的發展をとげたのである。このことは、将来にわたって国家の飛躍的發展を期そうとする、われわれの指針でなければならぬ。立脚点でなければならぬ。

わが国の現状をどう把握するか、その認識の仕方にもよるが、今日の日本は、明治維新当時とすこぶる似ているといえよう。内憂外患ということからすれば、全く同一の状態である。

戦後の混乱期からすれば、その後の内外の情勢の変化や国力の回復によって、是正せられる途上にあることは否定できない。しかし依然として内外において危機をほらみ、問題は深刻である。日本をとりまくものは、アラシである。国論は分裂し、国家の存立問題に対する自覚は、はなはだひ弱い。これを打開し、国家民族の歴史、伝統に即する本来の發展を指向するならば、国家の本質を考えた明治維新の教訓をこの際学ぶことが要請されるのである。これが明治百年を記念するものの態度であり、課題なのである。

明治の教育の再評価を

これは教育の面においても同様である。このところ占領下に行なわれた政改改革に対する反省が叫ばれ、再改革に進んでいる。中央教育審議会の教育制度是正の動き、現在重要事になっている教育課程の改訂がそうである。このことは、この二十年近い歳月の間に

定着してきた教育が、あくまでも「占領教育」の延長であり、正しい意味における国民教育ではないという点をかえりみるところがあつたからにほかならない。

その点で教育は新しい路線へのスタートをきったといつてよい。しかしながら、このスタートは現時点から出発するものであつてはならない。ここにおいて回顧しなければならぬのは明治維新以来のわが国の教育の進展のあとである。ことに明治初期において、困難の中から自主的な態度で、民族性に根ざした教育を推し進めてきた過程である。それは明治維新の精神が根底に存していたゆえに生まれた成果である。

そこで、今後、国民教育に対処するためには、明治の教育を再評価し、そこに出発点を求めて、再現あるいは継承すべきことを忘れてはならない。これが占領教育からの完全な脱皮なのである。

(昭和四十三年一月一日発行)

戦前の中学国語の教科書を読む (五)

「次の文章は、前回に引き続き『現代国語読本 巻一』(八波則吉編著)から採録したものである。句読点、送り仮名は原典通りである。ルビは増やして、現代の読者の便宜を図つた。なほ原典では漢字はすべて正漢字が用ゐられてゐるが、適宜常用漢字に直した。」

夏 休

幸田露伴

樂しき夏休は来れり。行李の紐はすでに締めて、俤だに来らば、今にも家に帰り得るほどに用意整ひし人もあらん。樂しきは夏休にこそ。御身が父母は指折り待ち給はん。御身が兄弟姉妹は日を数へて待ち居りなん。御身が今日の樂み、今年の樂み大いなるもの一つなるべし。

帰れ。飛ぶ如くに帰れ。野越え、山越え、はた海を越えて帰れ。帰りて父母の家に心緩やかにして夏を過せ。休むが為の夏休なれば、心落着けて大いに休み、さて来ん秋の九月に入りて励み務むるの精力を蓄ふるぞよき。

夏といふ語は「成立」の略にして、稻を始め種々の穀物皆此の時に当り成長繁茂し、根を張り幹を伸べて、やがて開花結実の因を為すをもて、しか呼ぶとぞ。此の頃南風快く吹き、烈日盛に照りて、天地の間に生氣横溢す。されば、千草万木皆各勢づきて榮え誇るのみならず、鳥の声は曉にいさみ、虫の翅は夕にきほひ、魚も溯り躍れば、貝も繁殖す。人も春より此の季に互りては、面の色も冴え、身の力も張り、鍛鍊を加ふれば肉体は發達し易き傾あり。

思へば、夏の天地は誠に壯快なり。梢を渡る旦の風、空に峙つ雲の峰、さては天の鼓の轟き循つて雷雨の沛然として至るなど、何れかをしからざらん。緑陰に書を読めば、翠光、詩趣と共に胸に沁み、小楼に箏を弾けば、檐の風鈴も清き音を和す。いと暑くて

苦しみ日も、一庭の穢を掃つて打水に夕の涼しさを招き、浴後を団扇片手にそぞろあるきしたるなど、其の楽しさは、冬は固より秋にもはた味はふべからざるものあらん。
よろづの家具どもを乱りがはしからず取片づけ、襖、障子開け放ち、さては廂まはり縁側など清らかに掃ひ拭き、汚れぬ衣着て、煩はしからぬ心持ちたらんには、夏は誠に好き時節なるべし。熱し苦しとのみ口癖に言ひて、我が務を怠り、或は昼寝に身を倦ませ、朝寝に心を荒ませては、夏ほど苦しき時はなかるべし。休み慰めんが為の夏休なれども、意味なき怠に快からず長き日を暮らさんは惜しむべし。夏休休暇の四十日、又これ御身が生涯の一部ならずや。



平成三十年度日本教師会教育研究大会次第

期日 平成三十年八月四日(土) 五日(日)
会場 「アルカディア市ヶ谷(私学会館)」
(各線 市ヶ谷駅下車)
研究主題 「近代教育の再検討
—何を得て、何を失ったか—」

一日目(四日)
1 開会式(12:30) 開会の辞・国歌斉唱・
会長挨拶・歓迎挨拶
2 記念講演(13:00)
演題 「日本の近現代教育と天皇
—今上天皇の譲位を来年に控えて—」

講師 明星大学戦後教育史研究センター

皇學館大学非常勤講師 勝岡寛次先生

3 記念講演についての討議(14:30)

4 実践発表①(15:00) 小学校(新潟県)

二条市立大崎小学校 小林義典先生

テーマ「祖国を貴ぶ教育」

実践発表②(15:45) 中学校(新潟県)

新潟市立関屋中学校 松井潔先生

テーマ「先人に学ぶ」

二日目(五日)

実践発表③(9:00) 高等学校(埼玉県)

フリースクール(技能連携校)

テーマ「人物を中心とした高校日本史

Bの授業実践報告」

6 総括(9:45) 京都産業大学名誉教授

若井勲夫先生

7 閉会式(10:15) 次期開催地代表挨拶・

閉会式挨拶・教師会の歌

8 定期総会(10:40) 平成二十九年事業

会計報告・平成三十年事業計画予算案そ

の他

主管 東京都教師会

□短信寸評□

明治天皇昭憲皇太后をお祀りする明治神宮は、昭和四十三年、明治百年を記念して両陛下ご親拝のもと、盛大な祭儀を執り行つた。ご鎮座記念祭の十一月一日を中心として十月二十八日から十一月十日までの九日間に亘つて

祭典が斎行され、同時に数多の奉祝行事も行

はれた。当日の祭によると、横綱手数入り、

吟詠吟舞、邦楽邦舞、舞楽、神前神楽舞、打

毬、馬場馬術、能楽、弓道大会、吹奏楽、合

気道、古武道、流鏝馬、花火発揚、献茶、短

歌大会、子供映画会など、実に多様な古今の

日本文化を代表する催し物に溢れてゐる。

中で、甘露寺受長宮司の「明治維新百年大

祭にあたりて」の言葉は「明治天皇の御聖徳

と偉大なる御事蹟は今更、申し上げるまでも

ありませんが、御在位四十数年の間、政治に

経済に教育に文化に、よく近代国家の建設を

成しとげられたのでありまして、今日の日本

の繁栄も明治の基礎なくしては到底考えられ

ないのであります。」として、よりよい日本

の建設のため御神前に誠心を披瀝して熱禱を

ささげたいと結んでゐる。

五十年前も今年も全く変はらぬ明治創業の

精神を受け継いで、我々は今後を見据ゑてゆ

かねばならないと、改めて思ふ次第である。

明治神宮では再来年の御創建百周年を迎へ

るにあたり、その盛儀の準備が今着々と進ん

でゐるといふ。

◎「東京の教育」への会員の皆様の「投稿をお待ちしています。」

送り先は題字下にあります。また、メールの宛先は次の通りです。

事務局アドレス(佐藤)

komasato@juno.ocn.ne.jp